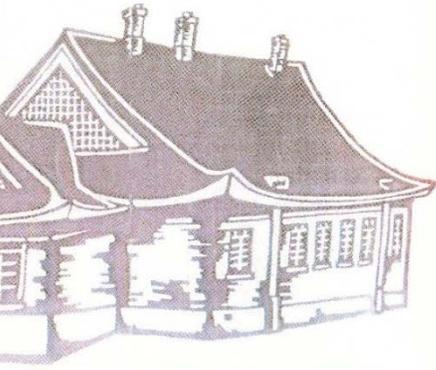


元満州開拓民の証言から —天理教の「出口」を求めて—

エイミー・ツジモト

天理教と七三一部隊

「生疏里」の記憶



満州開拓の裏面史

宗教教団は、むしろ積極的に国策に協力することで

布教と組織の拡大を図った……

弾圧を受けながらも逞しく生き延び、満州に天理村を建設するに至った天理教団は 731 部隊にも協力していた！

知られざる実態と驚くべき史実を

元開拓団員の赤裸々な証言から明らかにする問題作 えにし書房

プロローグ

第1章 日本の宗教教団の大陸進出

第2章 天理教の教義と苦難の歴史

第3章 いざ満州へ——風間博の回想による満州「天理村」の実相

第4章 天理村と隣接した 731 部隊

第5章 ソ連参戦と 731 部隊の撤退

第6章 天理村からの逃走——ソ連国境の状況そして敗戦

第7章 帰国への道

エピローグ

天理教は戦前、海外布教の実践として、国策にのる形で昭和9年に満州天理村を作った。ただその近くには関東軍の防疫給水部で、細菌戦の研究や人体実験を行っていた731部隊があった。

そのため、天理村の開拓民がその建設に、あるいは日本の敗戦間際には召集された天理村出身の少年兵が「マルタ」と呼ばれた人体実験に供された人々の死体処理をさせられた。

この本は、731部隊について二人の元開拓民から聞いた話を記したものである。

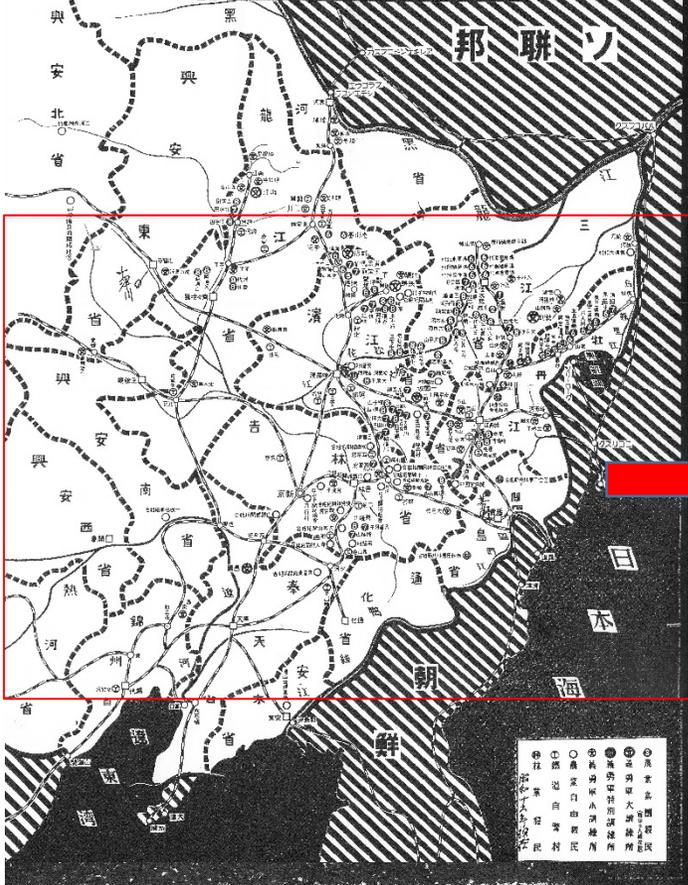
その一人である風間博氏は、戦後になってから、中国という国に開拓民として入ったこと自体が侵略戦争に加担する加害者になっていたのではないかとして、天理教団にその反省を求めた。しかし教団は逆に風間氏を糾弾したという。

満洲に開拓団を送ったのは天理教ばかりでなく、仏教各派も同様であった。ただ違うのは、戦後になってそれが仏陀の教えに反していたことを反省し、謝罪していることである。そして、仏陀、あるいはそれぞれの開祖の教えに戻って宗教としての社会的役割を果たそうとしている。

ところが天理教は、現在出口のない袋小路に押し込められたかのように社会から忘れられつつある。その原因の一つとして仏教各派がその開祖の教えに戻って出直したのに対して、天理教はそれが出来なかったからではないかという思いを持つ。

元開拓民の二人が語った731部隊との関わりを通して、天理教がその宗教としての役割を果たし得るようになるためには何が必要なのかを考えてみたい。

滿洲農業移民移入植園



天理村と731部隊の位置

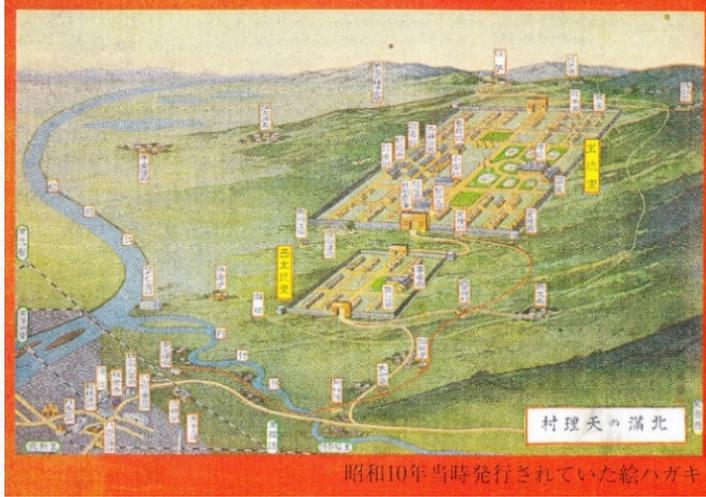
○、●などの印は、農業移民が入った場所を示す。

『旧満洲天理開拓民の歩み』添付地図
山根理一編著.私家版.1995より



- 農業集團移民
 - 義勇軍大訓練所 (数字は入植次数)
 - 義勇軍小訓練所
 - 農業自由移民
 - 鐵道自警村
 - 農業移民
- 昭和十五年現在

現在のハルビン市



昭和10年当時発行されていた給ハガキ

『満州天理村物語』2011. 山根理一. 私家版. カバー写真)

軍部によって中止させられた
第1次移民予定地
（『天理教青年会史第4巻』
P105の図より）

731部隊
（平房）

731部隊の敷地は6平方km程で塙で囲まれていたようだ。

満州天理村の開村は日本の開拓団史の中でごく初期であった

年月日	天理村建設までの過程(『天理教青年会史第4巻』P85～128による)
昭和7(1932)年	(3月1日満州国建国宣言) 9月ハルピン市近郊に移民の適地を見つける
昭和8年	(731部隊の前身、設立) 6月軍部の命で土地を放棄、国家直営の移民地となり、予定地買収不成立。 11月関東軍にハルピン市近郊への移民計画の願い書を提出。
昭和9年	1月関東軍の仲介により土地を購入、及びその指示に従う事で許可が出る。6月天理村の建設に着手。 11月9日天理村第1次移住者43家族が現地に入村。

	次数	入植年	地図上の 開拓団数	入植者数 (全国)	岐阜県民を含む 開拓団名
試験 移民期	第1次	1932 (昭和7)年	1団	1557人	弥栄村
	第2次	1933 (昭和8)年	1団	1715人	該当なし
	第3次	1934 (昭和9)年	1団	945人	瑞穂村 天理村開村
	第4次	1936 (昭和11)年	2団	7707人	城子河
一〇〇万戸 移住計画 第一期	第5次	1937 (昭和12)年	4団	7788人	朝陽村
	第6次	1938 (昭和13)年	17団	30196人	東海村
	第7次	1938 (昭和13)年	19団		朝陽川
	第8次	1939 (昭和14)年	38団	40423人	華陽 公心集読書
	第9次	1940 (昭和15)年	58団	50889人	徳命 七星坂下村 鳳凰 馬達河久田見
	第10次	1941 (昭和16)年	地図なし	35774人	鶏走河山県郷 柳毛溝恵那郷
第二期	第11次	1942 (昭和17)年	地図なし	27149人	該当なし
	第12次	1943 (昭和18)年	地図なし	25129人	武儀郷
	第13次	1944 (昭和19)年	地図なし	23650人	積翠 瑞穂 秀真 興和 西和良 東村
	なし	1945 (昭和20)年	地図なし	13545人	(岐阜県立図書館作成資料 HPより)

初期の試験移民期は、満州では反日闘争を行う勢力が強く、治安が不安定で在郷軍人(軍役経験者)の单身男性で編成された武装開拓団のみで、そこでも多数の犠牲が出たという。
その時期に家族の開拓団であった天理村は、軍部や移民関係機関の注目を集め、支援もあった。

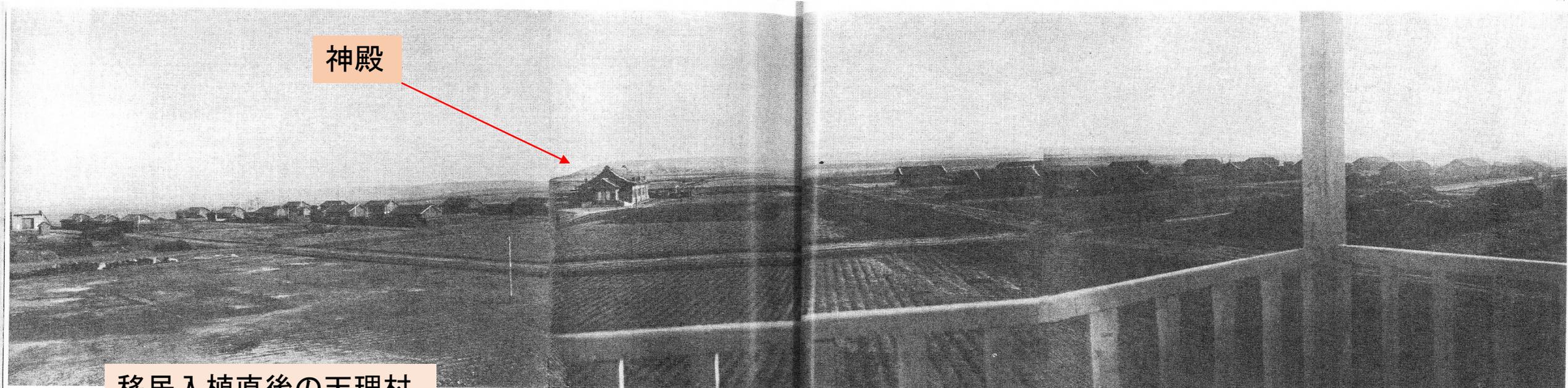
天理村建設のbefore(前) — after(後)

(『満州天理村物語』山根理一.私家版.付録の「生琉里画帖」より)



建設前の天理村 昭和9年5月26日.人がいるところが神殿の位置

(日六十二月五年九和昭) (置位の殿神の在現は點地合集の人・右てつ向) 野曠の前設建里琉生

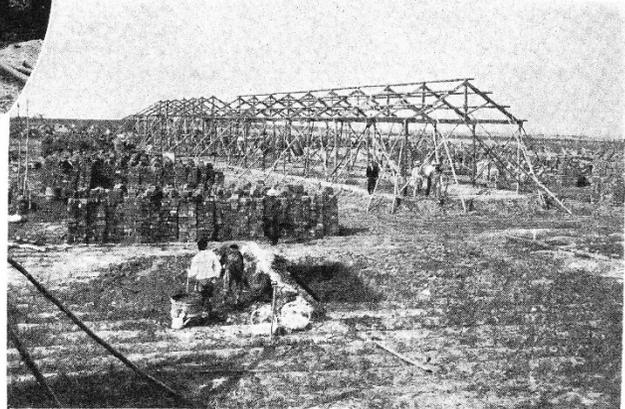
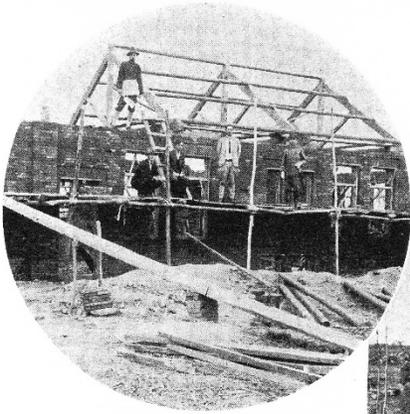
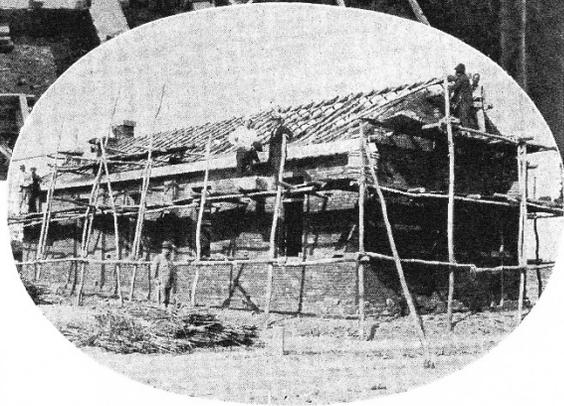
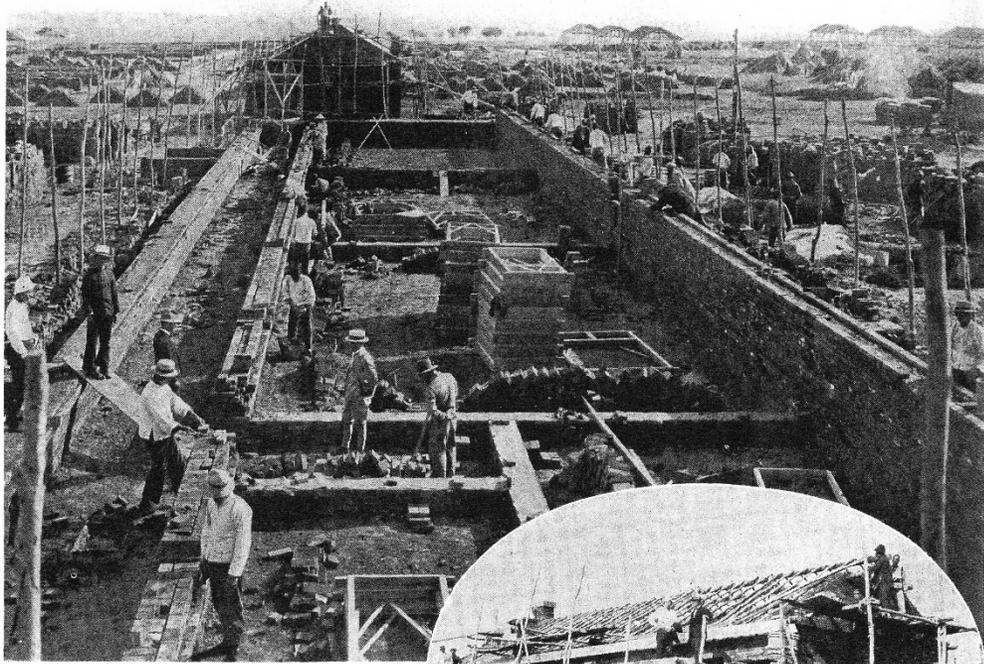


神殿

移民入植直後の天理村

景全里琉生の後直植入民移次一第

建築中の天理村



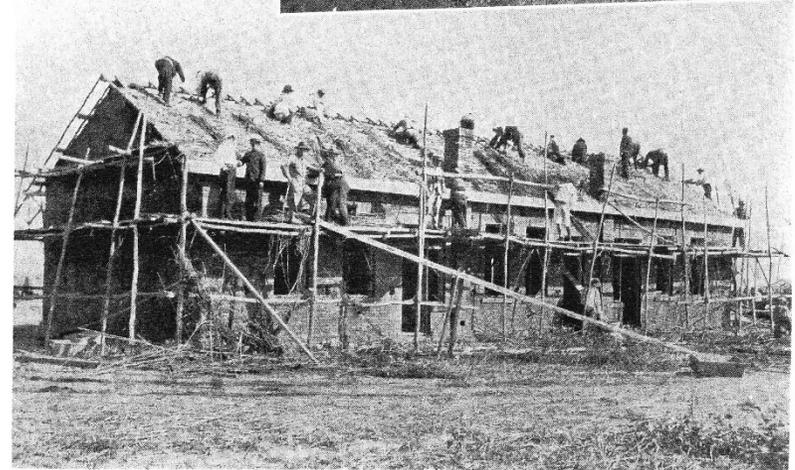
(上から)
小学校の基礎工事
事務所
工事中の診療所
職員宿舎



生琉里神殿基礎工事



骨組を終った生琉里移民家屋



工事中の巡查駐在所

(『満洲天理村「生琉里」の記憶』P168)

731部隊についての
記憶を語った
風間博氏と相野
田健治氏



天理村路標



歸村急天理村トツク



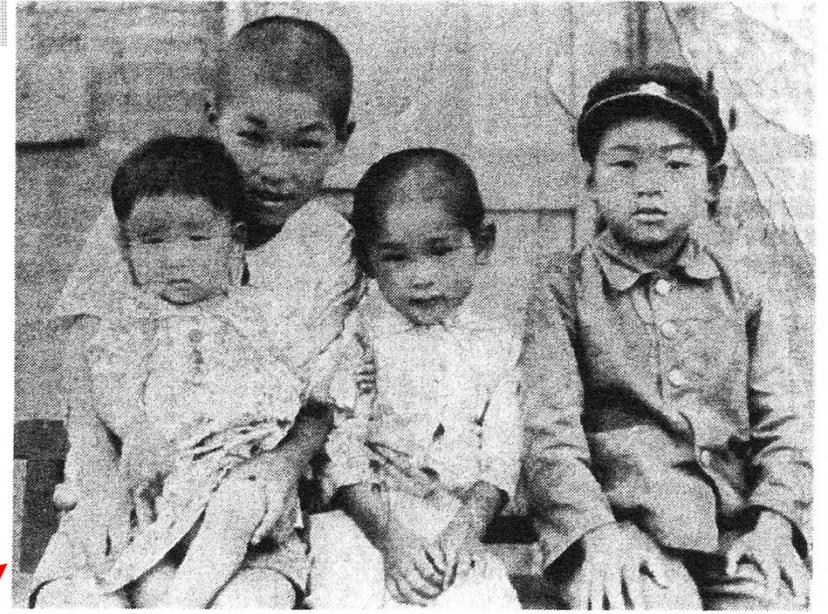
門正入口里琉生



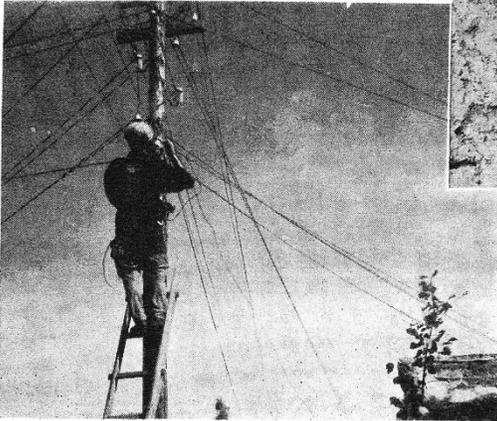
(撮影時訪中1990年) 家んだ住ん一家間風



警備演習



相野田健治 康雄 庄次 とも子 昭和10年前後の撮影



電線修理

(『満州天理村物語』山根理一.私家版.付録の「生琉里画帖』より)

相野田健治氏の証言―「マルタ」と呼ばれた人々の死体の焼却と建物の破壊を命じられ実行した。

戦況は日を追うごとに著しく悪化していた。兵士の補充は喫緊の課題となり、天理村でも召集が始まっていた。天理村から召集され、入隊訓練後に七三一部隊に配属となった青年も数人いる。その一人が、相野田である。／ 二〇〇九年夏、筆者は数人の旧満州天理村からの引揚者を交え、相野田の胸中を聞く機会を得た。天理村から七三一部隊に配属された者は他にもいたが、重い口を開いてくれたのは彼だけである。（『満州天理村「生琉里」の記憶』P127）

ある日突然、薪運びを命じられた。七月終わりのことだったと相野田は記憶している。運び終わると上官に呼ばれた。上官が指差す方に視線を向けると、壕の中に何百という屍が放り込まれていた。思わず目を背けた相野田の頬を、ビンタが飛んだ。

「薪を放り込めと言われてね。そんなことを言われてもポンポンと放り投げるわけにはいかない・・・できる限り敏速に、しかし並べて焚べていった。ようやく終わると、重油が撒かれた。その上にトタンのようなものを被せてね。それから自分が運んだまきに火がつけられていったんですよ・・・それはものすごい煙でね・・・真っ黒だった」／ そう言って、相野田はしばらく言葉を詰まらせた。

「不思議な、なんとも言えない匂いがしてきたよ。それからは本当に、しばらくは食事が喉を通らない日が続いた.....」

以降、来る日も来る日も薪を運ばなければならなかったが、ある日を境に、相野田の作業によりいっそうの拍車がかかった。しかも、棟内の特設監獄そばの中庭には、大きな壕がどんどんと掘られていた。相野田はそこに薪を運んだ。（P129）

相野田による回想では、ソ連の侵攻が始まった八月九日以降で最初の大混乱は十一日だった。

この日、石井部隊長が平房に戻り、恐ろしいほどの形相で部隊員を前に演説を行った。その様子を、昨日のこのように相野田は思い出すことができた。

「七三一部隊の秘密は、どこまでも守り通すのだ！　もしも機密を漏らすようなことがあっては、この石井はどこまでも追いかけて捕まえてやる！」

この言葉が呪縛となり、あの日から六十年以上を経た今も、自分の耳の奥で響いているという。

八月十二日夜、施設内におけるすべての死体遺棄作業は完了した。だがその後、彼らには重ねて過酷な作業が課せられた。施設そのものの破壊である。／ 施設の周りにダイナマイトを仕掛けるための穴掘りを命じられた。山砲で施設を撃とうとしたが、頑丈にできているためそんなものでは一向に破壊できない。次は野砲だが、それも適わない。とうとう、七三一部隊によって編成されていた細菌飛行隊用の一トン爆弾を数人がかりで施設のなかに仕掛けとして配備し、ようやく施設全体を爆破した。（P134）

風間博氏の証言 一天理村の男達は距離が近いこともあって731部隊の建設工事等に駆り出された。

青年会の募集に応じて満州に渡った一人に、本章で紹介する風間博がいた。

二〇一六年が明けて間もないころ、筆者は風間博の家を訪れた。このとき風間は一冊のノートを真っ先に取り出した。ノートはセピア色にあせ、余白のあちこちに走り書きのメモがあった。表紙にはマジックペンで《本日、敗戦から七十年》と書かれてあった。前年の八月十五日の朝、風間が記したものだ。 — 中略 —

風間も当初は、開拓村が日本の中国侵略という役割の一端を担っていたとは考えもしなかった。満州天理村という開拓団の存在も、敗戦によっていとも簡単に消え去るなどとは思ってもよらなかった。だが、戦後になって満州から引き揚げた後、ようやく風間は“気づいた” — 自分たちの天理教団が、大日本帝国の侵略政策に加担していたことを。

(『満州天理村「生琉里」の記憶』P86)

風間の父は、ハルビンから南へ二四キロメートルの地にある平房本部(後に七三一部隊と改称。第四章で詳述)の建設現場に駆り出されていた。しかも、それは命令ではなく、自ら率先してのことである。破格の給金に、信者たちの心は動いた。

「男たちは、皆行きたがった。だから二週間から三週間で交代したさ」

しかし、彼らが得た給金は彼ら自身が手にするのではなく、「お供え」として教会へ捧げられた。それが天理教の仕組みでもあった。

初めて聞く父の言葉に「誰が行きよったか」と風間は詰め寄った。しかし、「そんなことは知らんでもええ。お前の父がそんなことを、しておったんや」と父親は目頭を押さえて答えたという。

部隊本部の上空を無断で飛び交う飛行機はたとえ味方機であっても撃ち落とすべし、と厳命が出されていたほどすべてが秘密裏に運ばれていた部隊である。このように厳しく情報管理がなされていた施設の建設に従事させられたのは唯一、天理村だけであった。極秘密裏の施設であるゆえに厳重な警戒が敷かれ、周辺を幾重もの柵で囲み、レンガ積み作業に時間がかけられていた。何の訓練も受けていない天理村の大勢の男たちが、建設労働者として従事した。

「日本人なら秘密が漏れないとでも思ったのでしょうか」

風間はそう回想した。さすがに軍の意図を見抜いていたのか、「日本軍は七三一部隊の機密が漏れないよう日本の開拓団を使って周りを囲むことによって少しでも機密の漏えいを防いだ。それが純朴な天理教信者とあっては、うってつけだったんだらう」と風間の父は話したという。(『満州天理村「生琉里」の記憶』P100)

731部隊内での作業中に囚人のような人々が連れてこられ、その役割は人体実験のためであることを知った。

施設の中で行われたことを知っていたのだろうかという筆者の問いかけに、風間はさらりと答えた。

「ああ、親父は知っていたさ。作業を終えて片づけをしているときに何人もの中国人が歩いてくるのが見えたらしい」

彼らは、寒い中をサクサクと音を立て歩いていた。風間の父らは見て見ぬ振りをしながら、黙々と片付け作業を続けたという。風間の父が仲間たちと目にした光景について、後年、息子に次のように語った。

「夜昼の区別なく引き込み線に有蓋列車が入ってきた。列車からは少ないときで二十人くらい、多いときには五十人以上が降りてきた。支那兵は緑がかった軍服を着ていた。黒い服は農民だと思っ」

彼らはみな目隠しされ、後ろ手に縛られ、足には鉄の鎖が付けられていた。その姿はまるで囚人のようであったという。

—中略— 天理村からは三十～五十人の男が馬車に乗り、広大な施設の中の作業現場に通った。風間の父や間接的に伝え聞く証言から、そして戦後になって重い口を開いた天理村関係者たちの様子から、彼らの作業現場が人体実験用に建てられた通称「口号棟」(上空から見るとカタカナの「口」の字形をしていた)であったことが明らかになってきた。

「小指より細い鎖をつけられ、だらだらと歩いていた」

初めて施設に到着した翌日、指定された作業現場に入った父は、そこで「マルタ」と呼ばれる人々が杭に縛られ、髪の毛は杭の上に打ち付けられた針金に結び付けられているのを見た。寒空の中に放置された人間が、そのような状況で何日間生き延びることができるのかを調べていたのである。ほどなくして彼らが人体実験のために連れてこられたことを風間の父は知った。

—中略—

父の告白によって事実を知った風間は、教団をはじめ満州天理村を開拓した自分たちは戦争に加担した加害者として反省するよう、幾度となく教団本部に訴えた。しかし、教団が彼を相手にすることはなかった。それでもひるむことなく、彼は告発し続けた。

さすがに、天理教団から糾弾され、本部が満州天理村からの引き揚げ者のために準備した伊賀上野の開拓地(「伊賀生琉里」)で協力し合った仲間たちから村八分にされたことは、風間の心に大きな打撃を与えた。「身も心もすべてがぶっ飛んだ」という。しばらくは過去の記憶も喪失したかのような挫折を味わったが、自分自身を取り戻せたのは“父の告白”を自分の課題として引き継いだからだ。(『満州天理村「生琉里」の記憶』P101～105)

風間氏は帰国後、自分たちが戦争に加担した加害者であったという意識を持ち、教団本部に反省するよう求めたが、逆に糾弾され、また、同じ開拓民からも村八分にされた。

「天理教」は「国家権力に乗っかる形での布教など、とうていあり得ない」と見解を表明している。しかしながら移民が行われた当時の天理教機関誌『みちのとも』には明確に「国家の事業を翼成」し、「国策に順応」したものであることが述べられている。

本教が侵略戦争に加担して布教をおこなった、という論調が一部にあるようだが、これは事実を曲解する発言であるといわなくてはならない。虚心に天理教の海外伝道の歴史と現実をみるならば、そうしたことがないことは明らかである。

もとより、他国への布教伝道は、国際情勢と人の動きが大きな影響を与えることは、世界の宗教史を繙けば自明のことである。その意味で天理教の海外布教もその例外ではない。日本は、日清、日露戦争を経て、台湾、樺太などの領土を得、さらには韓国併合により、その国勢を拡大していった。それに伴うかのように教線も伸びていくが、だからといって、それが戦争行為に加担しての布教であったことを意味するものではない。すでにみてきたように、国家、民間を問わず淫祠邪教視されて攻撃を受けていた天理教が、国家権力に乗っかる形での布教など、とうていあり得ないことであった。

(『世界たすけへ更なる歩みをー『復元』五十年にあたって』P47.天理教表統領室特別委員会編.1995)

本教の海外発展は、当然実現すべき問題であります。最も手近なる例として、満洲伝道は、現在の我国家の状況から致しましても焦眉の急でありまして、本教の荒木棟梁を以て自認する青年会が、此の目的の為に満洲に志した事は、当然過ぎる位当然の仕事である。(中略)

満洲伝道、延いては海外伝道の第一歩としての満洲殖民計画は、神意の実現であると同時に、国家の事業を翼成するものである。(中略) (『みちのとも』昭和七年十一月二十日号 一〇頁～一二頁)(『天理教青年会史第4巻』1986.天理教青年会本部.P87)

・・・満洲国の開発、満洲国の国運の伸展を図ることは我国の国策であります。この国策に順応して満洲国の精神的文化開発を目標とし、同時に、親神様の思召の世界人類更生へ踏み出そうとするのが、抑々(そもそも)今回の天理村であります。

そこでだ、この天理村は啻(ただ)に帝国移民事業の雛型となるばかりでなく、友邦三千万民衆の精神的文化開発に力を注ぐところに、その重大なる使命があるのであります。親神様の思召に添ひ、国策に順応し、北満の新天地に天理教精神の文化を建設するといふ事は何たる痛快事であらう。荒木棟梁としての本懐これにすぐるものはないのであります。(『みちのとも』昭和九年十一月五日号 三〇頁)(『天理教青年会史第4巻』P87)

風間はつぶやいた。／「まことに国家というものは、自国の富を求めて他民族を侵略し、彼らの富を略奪することも辞さないものだ」

国家の行為は、確かに風間の言う通りである。ただし、普遍的真理を説く宗教は国家とはその本質において異なるものである。普遍的真理を実践して初めて、天理教のみならずあらゆる宗教指導者は国家という存在を超えて多くの人々の立場に寄り添うことができるのではないだろうか。あの時代もそして今日も、幾多の民族を犠牲にしてその上に自分たちの繁栄を築こうとする国家との根源的な間違いはここにあるのだ。(『満州天理村「生琉里(ふるさと)」の記憶』P211)

かえりみれば天理教の歩みは、教祖の教えをどこまでも伝えていこうとした努力にもかかわらず、国家をはじめとする迫害干渉、弾圧という激動の渦中で、その奔流に流されるような形でしか活動が認められなかった時期があったからとはいえ、とくに日本の戦争遂行期にあって、信仰的教説が政治的国家的視点のもとに従った一面があった、という事実を直視しなければならぬ。

国家とは、人間が線を引いた枠組みに立つところの存在である。しかし親神には、国家、民族による区別はなく、ただただ「子供可愛い」、「子供たすけたい」ばかりである。天理教人は、その親神の世界たすけの「よふぼく」を自認し、神の教えを伝え、人々をたすけるという尊い使命を担いながら、とくに国家膨張期において、他民族に対する尊大な態度はなかったのか、またいろいろな場面で、日本国民としての枠組みに閉じ込められた発言や行為がなかったかどうか、そして、いまもそうしたことがないか、私たちは真摯に振り返ってみるべきであろう。(『世界たすけへ更なる歩みを』P70)

宗教は国家という枠を超えたところにその存在意義がある

『満洲天理村・・・』の著者は、エピローグの部分で「普遍的真理を実践して初めて、天理教のみならずあらゆる宗教指導者は国家という存在を超えて多くの人々の立場に寄り添うことができるのではないだろうか」と言う。

「国家という存在を超える」ところに宗教の存在理由があるという意味で、天理教団の『世界たすけへ更なる歩みを』も

「日本国民としての枠組みに閉じ込められた発言や行為がなかったかどうか、そして、いまもそうしたことがないか、私たちは真摯に振り返ってみるべきであろう」と述べている。

「親神様の思召に添ひ、国策に順応」(『みちのとも』昭和九年十一月五日号 三〇頁)するのではなく、「親神様の思召に添」う事だけを考えることが重要だったのであり、今後の課題として、社会の動きや国策に向き合うためには、「親神様の思召」とは何かを真摯に求め続けることが大切なのである。

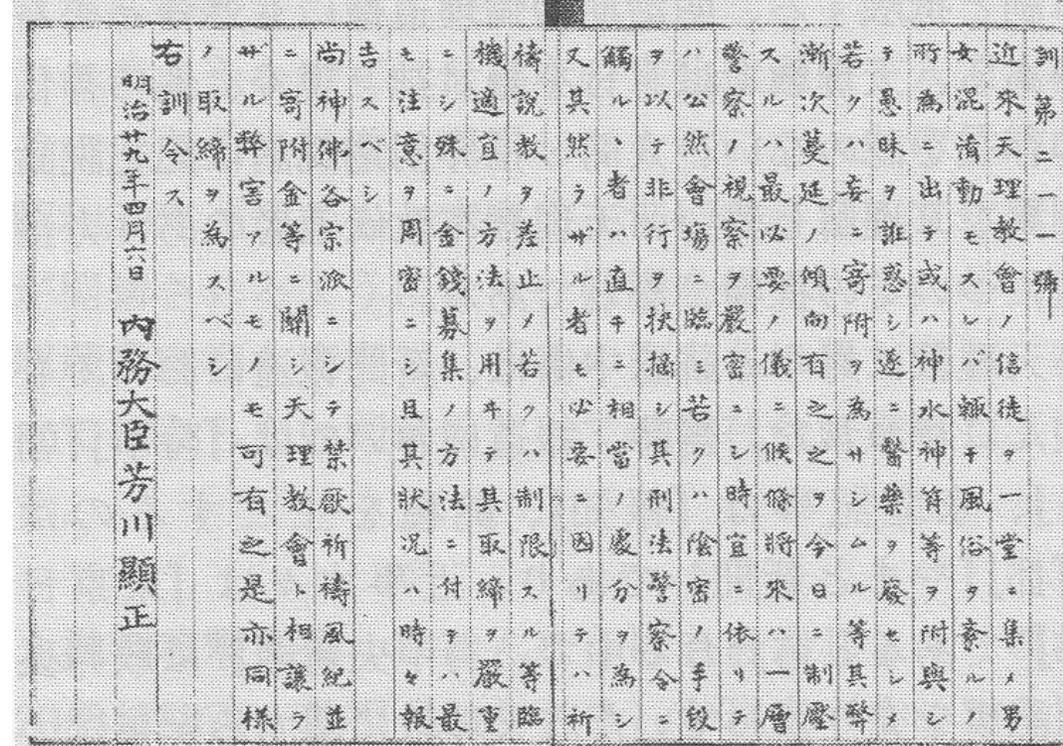
天理教の海外布教の歴史

初期の海外布教は、各教会で独自に結成された青年会員の行動によるもので、明治29年(1896)7月アメリカと樺太へ、同30年(1897)台湾へ、同30年(1897)と同36年(1903)ソウルへ、同38年(1905)中国東北部へ、同41年(1908)ロンドンへと海外布教は拡大されていった。大正に入ると天理教機関誌『みちのとも』(又は『道乃友』)こ、海外布教に関わる記事が多く寄せられた。

「天理教青年会」の発足 当初の海外布教活動は、各教会独自に結成された青年会によって担われていたが、大正6年(1917)7月に天理教本部内に「本部青年会」が結成された。本部青年会顧問に就任した松村吉太郎は、結成の挨拶で「尤も世界を救う道たるに則り、今日の状況に鑑みれば決して学問智識を閑却することならぬ。」更に「これ本教に天理教校、天理中学、を設立し、更に進んで天理大学をも設立しなければならない所以である。」と、海外布教に必要な教育機関の設立の必要性を訴えた。

翌年大正7年(1918)10月25日に、全教内の青年会の統一組織「天理教青年会」が発足した。同日第一回総会で、山沢為造会長は「青年会の使命は海外布教にあり」こと青年会を明確に位置付け、続いて青年会顧問の松村吉太郎は「本教が今や世界に其救済の実を挙ぐべき旬刻限が到来していることが知れるのであります」と述べて、海外布教に全力を挙げて取り組む姿勢を表明した。

一方で、満洲・朝鮮に在住の布教師たちから活動の困難な状況の報告と外国語習得の重要性を訴える論考が『道乃友』に寄稿されるようになる。(『天理外国語学校』P67~69.奥村恵介.2017.文芸社)



内務省訓第211号「天理教会に対する取締訓令（発議）」

(『天理教事典第三版』P812)

明治29年に内務省から発せられた天理教取締りの為の訓令甲第12号(通称「秘密訓令」)により、天理教団は教義等の変更を行った。これが原因でその変更により異を唱える教師が多数罷免され、また自ら教団を去る教師も出て、教勢は鈍化した。ちなみに現在の主要な天理教教会はこの時期までに出来ている。そのような状況を打開する一つの方策が海外布教だった。

海外布教への熱意－天理外国語学校の設立－朝鮮語科の設置

天理大学の前身である天理外国語学校は、大正14(1925)年に各種学校として認可され、昭和2年に兵役が免除される専門学校になった。昭和20年以前に専門学校令による外国語学校は官立の東京外語、大阪外語と天理外語のみであり、朝鮮語科があったのは天理外語だけであった。

最初各種学校で認可を受けたのは、奈良県庁への申請で認可を受けやすかったこと、男女共学が認められることであった。朝鮮語の許可も再三の交渉の末に「当分のうち」という条件付きであった。



(『天理外国語学校』表紙カバー写真)
この建物は現在も天理大学校舎として使われている。

朝鮮語教育へのこだわり 前述の中山講演で述べた「(朝鮮語を)どうしてもやらなければなりません」という発言の意図と背景は何であろうか。内地では既にどこの高等教育機関でも朝鮮語教育を廃止していたにもかかわらずである。

それはまず天理教教義に依拠する。天理教教祖(中山みき)が明治15年(1882)に発した口伝に「…それから先は世界隅から隅まで天理王命の名を流す」とあり、世界を救済することにあつた。その口伝を実現すべく明治26年(1893)釜山に上陸したのが、天理教の海外布教の嚆矢とされている。同時に、朝鮮は満洲への足がかりとするために極めて重要な位置付けとなり、「朝鮮及び満洲は海外布教の土臺となるのであって、朝鮮及び満洲の成功、不成功は将来本教の海外布教の命運を左右するので、本教としては朝鮮、満洲の布教において多大の注意を拂い、多大の努力をせねばならないのであります」というのが、天理教の方針であった。大正4年(1915)9月時点での信者数は、朝鮮(20,730人)が最も多く、次に支那(8,797人)、ウラジオストック(395人)、シンガポール(259人)などとなっていたことから、朝鮮を重要視したことが分かる。そして、布教における朝鮮語は「一國の國語と云ふが如きものは、そう一朝一夕に變化すべきものではない。鮮語が滅亡するが如きことは、将来はいざ知らず近き将来に於いては、決してあり得べきことではない。然らば鮮人教化には是非鮮語を解さねば奏功せぬ。」という現地語主義が教団の一致した認識であった。一方で、内地では一般的に朝鮮語を「外国語」ではなく「一地方語」と認識されていたにもかかわらず、天理教団では「民族言語」として認識していた。(『天理外国語学校』P79.奥村恵介.2017.文芸社)

天理教海外布教の趣旨と顛末－天皇制国家の枠の外で布教をしよう！⇒軍隊の中国侵略の方針に組み込まれた

こうしておさしづが復刊されて立教九十年代(1927(昭和2)～37)に入るわけですが、この九十年代は、二代真柱が先頭に立って立教百年祭に向かって復元促進が呼ばれた時代なのです。／ 昭和二年から各教会におさしづの配付がされ出したという時期、昭和二年十一月に、なぜ皆に原典を渡すのかということで諭達が出ております。その一節に、

「世界隅から隅まで」ノ神意ヲ如実ニスベキ時句ヲ迎ヘタルモノト訓フベシ 若シ夫レ天与ノ時句ヲ察知セズ一列救済ノ神意ヲ悟得セズ徒ラニ小天地ニ踟躑シ唯国内ノ神教タルニ甘ンジテ自ラ足レリトスルアラバ焉ゾ「世界一列は皆兄弟」ノ妙諦ヲ具現シ得ベキ時アランヤ 則チカクノ如キハ宏大無辺ノ神慮ニ報ヘ奉ル道ニアラザルナリ

と言われております。

この中の「踟躑(きよくせき)」というのは、踟天躑地のことで、天にせぐくまり地に抜き足すること、身の置きどころのない思いをしてひどく恐れることを言っているのです。

七十五年たてば日本あらあらず、それから先は世界隅から隅まで天理王命の名を流すということが古い先生方によって伝えられていたのです。その立教七十五年はとくに過ぎたのだというふうには真柱様はとらえまして、しかもこういう原典を印刷して表に出したけれども、天皇政府の弾圧はいよいよ激しくなり、治安維持法が死刑設置にまで改悪されるという時期ですから、そういう雰囲気の中で真柱様は、お道を説くことの限界を感じられたのです。／ 天皇崇拜しか説くことを許されない日本の国の中で、教祖の教えを説く ということは大変な官憲の圧迫を受けるわけで、こんなことで世界じゅうにお道が説けるか、それならいっそのこと天皇制下の日本から脱して広い世界に出て行こう、こういう宣言をここでなさるわけです。／ 天皇制国家の中で、いかに大きな宗教になっても、教祖の教えは正しく説けないというわけです。外国に行ってしまうえばその制限がなくなり、原典がそのまま説けるのだ、だから原典を印刷して皆に渡し、そして教祖の教えとはケタ違いのとんでもない方向はずれのことを進めている日本の法律から離れて、外国で正しい道を説こうというのが、原典を出版するときの宣言なのです。

全くすごい真柱様の姿勢なのですが結果としては、この十年間に、この諭達の精神がひどい状態で実現されてしまうということになるのです。このあと、日本の軍国主義者たちは、どんどん力を得まして、朝鮮を足がかりとして、満州に手を伸ばし、中国を支配しようというところから満州事変を起こして、満州に建国をいたしまして、日本の法律の及ぶところをつくってしまうわけです。

その時期に天理教は外国で布教するのだと言って、満州に新天地を求め、天皇制国家の支配の及ばないところに一れつ兄弟助け合いの理想郷をつくるのだという思いでやったところが、これが残念なことに軍隊の中国侵略の方針に組み込まれてしまうことになったのです。本当に理想を実現するためには、少しの妥協も許されないのです。わずかのことで妥協いたしますと、全体がとんでもない方向に流れてしまうということを、この年代にしみじみ感じるわけでありませう。(『ほんあづまNo119』P9.1979.八島英雄)

他宗派の戦争協力に対する反省

曹洞宗「戦争責任」懺謝文全文

われわれ曹洞宗は、明治以後、太平洋戦争終結までの間、東アジアを中心にしたアジア地域において、海外開教の美名のもと、時の政治権力のアジア支配の野望に荷担迎合し、アジア地域の大びとの人権を侵害してきた。また脱亜入欧の風潮のもと、アジアの人びととその文化を蔑視し、日本の国体と仏教への優越感から、日本の文化を強要し、民族の誇りと尊厳性を損なう行為を行ってきた。しかも仏教の教義にもとるようなこうした行為を、釈迦牟尼世尊と三国伝灯の歴代祖師の御名のもとに行ってきた。まことに恥ずべき行為というほかない。

われわれは過去の海外伝道の歴史の上で犯してきた重大な過ちを率直に今日し、アジア世界の人ごとに対し、心からなる謝罪を行い、懺悔をしたいと心う。

しかし、それはかつて海外伝道に従事した人たちだけの責任ではない。日本の海外侵略に喝采をおくり、それを正当化してきた宗門全体の責任が問われるべきことはいうまでもない。

ー以下略ー

一九九二年十一月二十日 曹洞宗宗務総長 大竹明彦（「曹洞宗報」平成五年一月号より）（『ほんあづま』289号P23）

曹洞宗は明治以後昭和20年の敗戦までの海外活動について「懺謝文」を発表している。

また、真宗大谷派は、石川県珠洲市での原発設置への反対運動の中で戦国時代の一向一揆での敗北以後の体制化した教団のあり方について、明治以降昭和20年までの戦争協力も含めて自己批判を行っている。

そして曹洞宗も大谷派も同じ文章の中でともに「仏教は」という言葉から始まる一節で、自派の戦争協力、あるいは現代社会の病巣を見つめている。

その宗教の開祖の教えにしっかりと足を置いて思案する姿勢がそこにはある。

そうしたことが、次の活動へのステップになっているようだ。

真宗の自己批判

珠洲市の阻止行動の中で、多くの僧侶が反原発に関わっている姿をマスコミから知らされた若い女性が、「なぜ、坊さんたちが反対運動に関わるのか？」と座り込みを続ける一人の老婆に尋ねた。

坊さんたちはなあ、ながあ〜い間、寺の中の厚い座布団の上に座ったままで、なんも(何も)仕事をしてこんかった。その長い間のツケを、今ここで払いはじめたんや。

と答えた後、この老婆は親鸞聖人が国家権力によって流罪にされたことを語っていった。背筋に寒い思いをしながら耳をそばだてて聞いた言葉であったが、同時にこういう一人の門徒がおられたことを、能登で生きてきた僧侶として今でも誇りに思っている。しかし、私たちが問題にしなければならないことは、その老婆の言う「長い間のツケ」とは何かということをはっきりとすることである。

私たちの教団は一向一揆敗北以降、江戸時代の中で寺檀制度を受け入れ、身分制度を維持する基幹として体制化してきた。教団が果たしてきた役割は、幕藩体制に無批判的に従属していく人間を生み出すことであったと言わねばならない。そのため、もともと有効に機能したのは、「極楽浄土」という現世を批判する浄土教の基本概念を、死後の世界へと追いやったことであろう。そして、「上見て暮らすな、下見て暮らせ」という言葉が象徴するように、身分制の矛盾に眼をつむり、個人的な心の平安や死後の平安を求めさせてしまった。結果として寺院は、「宗門人別帳」によって民衆の生殺与奪権を握った大きな権威として、身分差別を温存しながら自らは民衆の上に君臨した。明治時代には、「富国強兵」を標榜する政府の下、親鸞聖人の意志に反する「真俗二諦論」という教義を展開する。その「真俗二諦論」によって、宗教的問題(真諦)と現実の生活(俗諦)を別々な問題として位置づけたのである。宗教的領域と現実の生活の領域を明確に分けることによって、新しく登場した天皇制国家を問う視点など生まれようはずはない。明治期から敗戦まで、真宗教団はこの真俗二諦論を「ご消息」として、徹底的に末端まで行き渡らせた。／－中略－

さらに問題なのは、宗教と現実を切り離れたそのうえで、「俗諦」という現実生活の教えの中味は教育勅語であり、「皇恩」「皇国」の徹底であり、「お上」に対する服従であり、それが真宗門徒の生活規範とされたことである。「お上」に対する服従や侵略の正当化の教育は、真宗王国といわれる北陸の中では、学校以上に日常的に開かれる寺の行事やお講の中でされていった。(『いのちを奪う原発』P14)

自己批判の中身①江戸時代に身分制を維持する体制になり、幕藩体制に無批判な人間を生み出した。

②「極楽浄土」という現世を批判する教理を死後の世界に追いやった。

③明治期には、「信俗二諦論」を説き、宗教と現実生活を別々の問題と位置付けた。

④現実生活(俗世界)の教えとして教育勅語を説き、「お上」に対する服従を説いた。

⑤悪因悪果善因善果の因縁論は差別を助長し、差別されるものに忍従を強いた。

曹洞宗は仏教の教えから見て、自派の戦争協力の活動がそれに反していたと自己批判している。

思うに、仏教は、すべての人間が仏子として平等であり、如何なる理由によるうとも他によって毀損されてはならぬ尊厳性を生きるものである、と説く。しかるにその釈尊の法脈を嗣受することを信仰の帰趨とするわが宗門が、アジアの他の民族を侵略する戦争を聖戦として肯定し、積極的な協力を行った。

特に朝鮮・韓半島においては、日本は王妃暗殺という暴挙を犯し、李朝朝鮮を属国化し、ついには日韓併合により一つの国家と民族を抹殺してしまったのであるが、わが宗門はその先兵となって朝鮮民族のわが国への同化を図り、皇民化政策推進の担い手となった。

人が人として存在する時、人は常に自らの帰属する場所を求めずにおかない。家族、言語、民族、国家、国土、文化、信仰等、自らが帰属するアイデンティティーを保証されるとき、人は安息を覚える。アイデンティティーは人間の尊厳性を保証するものなのである。しかるに皇民化政策は、朝鮮民族の国家を奪い、言語を奪い、創氏改名と称して民族文化に根ざした個人の名前までも奪い去った。曹洞宗をはじめとする日本の宗教は、その蛮行を宗教により正当化する役掌を担った。

また、中国等においては、宗門が侵略下における民衆の宣撫仕事を担当し、中には率先して特務機関に接触しスパイ活動を行った僧侶さえいた。

仏教を国策という世法に隷属せしめ、更に、他の民族の尊厳性とアイデンティティーを奪い去るという二重の過ちを犯していたのである。（「曹洞宗報」平成五年一月号より）（『ほんあづま』289号P24）

真宗大谷派は、仏教の教えを示して「『豊かさ』を獲得するために奪ったもの」に目を向けることの大切さを主張している。

他化(たけ)自在天という現代社会

仏教は、人間の迷いの生の現実を地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天の六道という概念で表現をした。「天」も迷いの生の現実である。その「天」のひとつに「他化自在天」という「天」が明らかにされている。「他化自在天」とは「他の所化を奪って自らの物になす」と表現されているように、他の者が作り育てた物を奪い自らのものとなし、奪われた側に眼も向けず、自らが得たことだけを喜び、さらに「有頂天」に浸る。まさに、物質的な「豊かさ」にあふれた、私たちの生きる現代社会を言い当てた言葉ではなかろうか。「天」は「豊かさ」を獲得した側には心地よい世界であるが、問題はその「豊かさ」を獲得するために奪ったものが何であるのかということと、奪われた側の姿が見えないということであろう。そのことを見つめることなしに、「天」を迷いと知ることもないのだと、仏教は教えているように思う。（『いのちを奪う原発』P2.東本願寺出版部.2002）

天理教団は、「国家からの弾圧干渉のもとにあった時代の教内には、国家に表明した教義体系と教会内に流布していた教義体系の二重構造があった」が、布教の現場では「国家に表明した教義体系」は何の役にも立たず、「教会内に流布していた教義」が生き続けたとし、戦後「教典」「教祖伝」「三原典」が整えられたので、あとはそれに基づいて信仰生活を送ればよいという。それにもかかわらず、現在の袋小路に入り込んで出口を見いだせないような状況はどうして生まれたのだろうか。それは、ここに示された教団の教義理解に誤りがあるからではないのだろうか。

以上に述べたように、国家からの弾圧干渉のもとにあった時代の教内には、国家に表明した教義体系と教会内に流布していた教義体系の二重構造があったという事実を指摘することができる。

このことは天理教に救いを求める人々に対する布教師、教会長の信仰指導が、国家神道の体系と教理をもってしては何の力にもなり得なかったことを意味する。とともに、なお自らがたすけられた実体験のなかから学び、教えられた「教え」を説いていかないことには、救済が成就し得なかったということを明らかにしている。いいかえれば、いかに厳しい干渉と弾圧をもってしても、天理教信仰の自立性、主体性を奪うことはできないという事実を明白に示しているといつてよい。（『世界たすけへ更なる歩みを』P44）

（昭和）三十一（1956）年、教祖七十年祭には全教会に『おふできき』が下付され、『稿本天理教教祖伝』が編纂されて出版された。教祖伝は単なる伝記としてではなく、教典によって信仰的に物事を判断するとともに、教祖伝によって「ひながた」を求め、陽気ぐらしの足取りを進めるための実践教義書としての位置づけがなされている。

そうした点から、教祖七十年祭は「陽気ぐらし」への門出としての意義を世界に向けて表明したものであったといえる。 「陽気ぐらし」に向けての日々の信仰生活のあり方は、具体的に「神一条の精神」「ひのきしんの態度」「一手一つの和」という三信札に示された。さらには朝起き、正直、働き、という教えの実践、内に「たんのう」、外に向かつては「親切」、というように、次々と陽気ぐらしを味わう道を教示されたのである。

（昭和）四十一年、教祖八十年祭には『おさしづ改修版』全七巻が全教会に下付された。これをもって、二代真柱が念願していた啓示書としての三原典が、全教会に返付されることとなったのである。ここに『天理教教典』『稿本天理教教祖伝』と併せて、信仰生活の根本となる教義書が全教会に揃い、ゆるぎなき信仰の基礎が築かれたといえよう。大正十四年以来企てられてきた原典を通しての信仰の確立のための歩みが、紆余曲折を経ながらも途に就いたといえる。あとはこうした原典、教典、教祖伝に基づきながら、「たすけ一条」の喜びに徹した陽気ぐらしの信仰生活を力強く押し進めていただけとなった。（『世界たすけへ更なる歩みを』P62） 19

実践教理がまとめられている『天理教教典』第7章、第8章の構成

貸物借物

身上は親神からの借物—親神の思召に従って使うのが大事

ほこり

神の思召にもとる行い、心使い
↓
身上、事情に現れる
普通定命まで生きられない⇒身上を返す(出直し)

因縁

前世の因縁は、自分の過去を眺め、先祖をふり返ることで悟る事が出来る。「いんねんの自覚」
「陽気ぐらし」をさせたいとの親心が、因縁を発現させている。

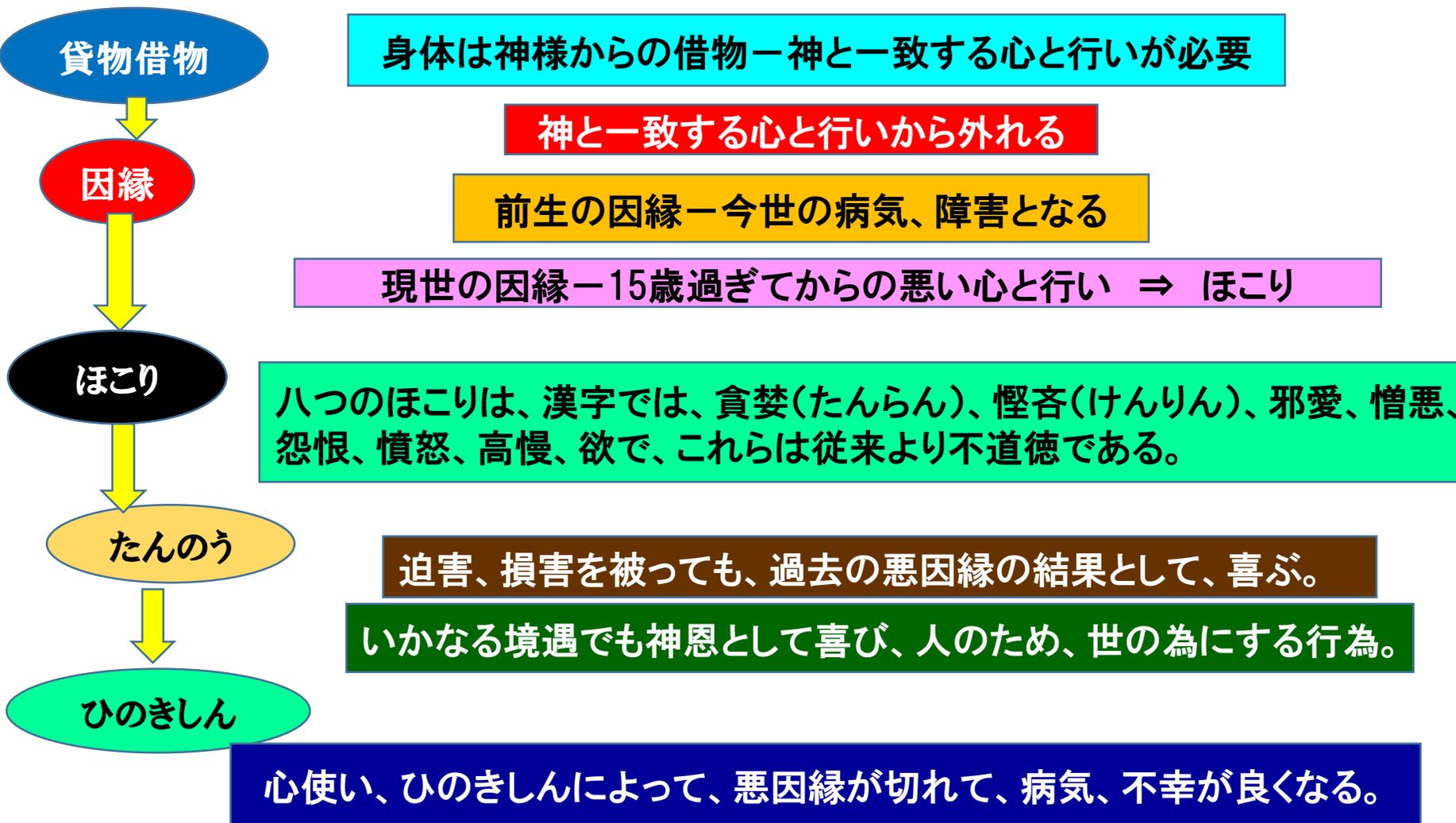
たんのう

「たんのう」は「前生因縁のさんげ」

ひのきしん

信仰のままに、喜んでする行為

『三教会同と天理教』 「教理の要領」の構成



三教会同は、1912(明治45)年2月25日に、内務次官の床次竹二郎が主導して、神道(13人)、仏教(51人)、キリスト教(7人)の代表、計71人を華族会館に呼び、行われた会同。集まった代表を前に内務大臣の原敬が挨拶した。

その時、天理教道友社は「三教会同と天理教」という本を出し、その緒言には次のように書かれている。

「本書は三教会同の顛末を叙し次に我が天理教の教理を述べ以て教育勅語戊申詔書軍隊勅諭の御趣旨を発揮し我が國髓を擁護し我が國民道徳を振興し以て現代の學校教育及び社會教青の不足を補充し更に進んで箇人に對する人心救済の大目的を遂行して人類社會を根本より救済するは我が天理教の目的なることを説明せるものなり」

『三教会同と天理教』と『天理教教典』は、構成、内容が非常によく似ている。この教えが「教祖の教え」そのままであれば、教祖が警察に連れて行かれることも、「秘密訓令」が出されることもなかっただろう。

『世界たすけへ更なる歩みを』(天理教団)の「復元」観

教祖の教え

明治29年
秘密訓令
以後

「明治教典」
国家の押付教理

昭和20年
敗戦

教祖の教えに
復元

「復元」完成

教会内に流布していた教義体系
(教祖の教え)

三原典の復刊

「昭和教典」
『稿本教祖伝』
『教祖伝逸話編』

教理の二重構造(「教祖の教え」と
「明治教典の教え」)時代

シンプルな構造になっているが、実態とはだいぶ異なる。

本来の「復元」

教祖の教え

吉田神祇管領の教え

三条の教則の教え

明治教典の教え

「悪因縁」の教え

「出直し」の教え

「朝起き、正直、働き」の教え



教祖以外の教えを
捨てて、教祖の教
えのみを取り出す

教祖の教え

正しい教祖伝、史実に基づく「みかぐらうた」
「おふでさき」の解釈が必要。